

高橋虫麻呂の「富士の山を詠む歌」のミ語法表現と その原文表記 — 詠作意識と私歌集編集意識 —

On the Expression and Text Notation by Mi Usage of The Poem on
Mt.Fuji composed by TAKAHASHI-NO-Mushimaro:

The Awareness to Produce Poems and to Make up Personal Book of Poems

鈴木 武晴

Takeharu SUZUKI

一、序

万葉集巻第三に収録されている高橋連虫麻呂歌集所出の虫麻呂作と認められる「富士の山を詠む歌」(三一九～三二一番歌)は、神亀元年(七二四)夏六月の作であることをすでに立証した(「山部赤人の富士歌と高橋虫麻呂の富士歌の詠作年月と詠作事情」、都留文科大学研究紀要第94集、二〇二一年十月発行)。

この歌の第二反歌三二二に見られるミ語法表現とその原文表記に

は特色があり、高橋虫麻呂の詠作意識やその私家集『高橋連虫麻呂歌集』の編集意識と密接に関わっていると考えられる。
以下、具体的に述べよう。

二、詠作意識①—笠金村の吉野讃歌との関わり

考察対象の「富士の山を詠む歌」の全体を書き下して掲げておく(第一句の枕詞「並吉みの」は本稿者の説に拠る^(注1))。

富士の山を詠む歌一首并せて短歌

並吉みの甲斐の国 うち寄する駿河の国と こちごちの国の
 み中ゆ 出で立てる富士の高嶺は 天雲もい行きはばかり
 飛ぶ鳥も飛びも上らず 燃ゆる火を雪もち消ち 降る雪を火
 もち消ちつつ 言ひも得ず名付けも知らず くすしくもいま
 す神かも せの海と名付けてあるも その山の堤める海ぞ
 富士川と人の渡るも その山の水のたぎちぞ 日の本の大和
 の国の 鎮めともいます神かも 宝ともなれる山かも 駿河
 なる富士の高嶺は 見れど飽かぬかも (三二九番歌)

反歌

富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降り
 けり (三二〇)
 富士の嶺を高め畏み天雲もい行きはばかりたなびくものを
 (三二二)

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。類をもちて、
 ここに載す。

本稿者が注視する表現は、反歌三二一の「富士の嶺を高め畏み」(原文「布士能嶺乎高見恐見」というミ語法表現である。

ミ語法は、形容詞または形容詞型活用助動詞の語幹に接尾語「み」が付き、多くの場合、上に間投助詞「を」を伴って、原因・理由を表わす語法である。

当面の「富士の嶺を高め畏み」は、「富士の嶺を」を受けて、形容詞「高し」の語幹「高」と形容詞「畏し」の語幹「畏」のそれぞれに「み」が付いた形の表現で、「富士の嶺が高くて恐れ多いので」

の意である。

このように、「——をりみ」の形のミ語法表現の例は、万葉集中他に「人言を繁み言痛み」(巻二・一一六番歌、巻四・五三八番歌、巻十二・一九三八番歌)と「山川を清みさやけみ」(巻六・九〇七番歌)の二つの表現しか見られない。このうち、当面例のように自然関連ミ語法表現は後者「山川を清みさやけみ」の一例ということになる。この「山川を清みさやけみ」(原文「山川乎清々」が用いられている歌は、次の歌である。

養老七年 癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、笠
 朝臣金村が作る歌一首并せて短歌

滝の上の三船の山に 瑞枝さし繁に生ひたる 榎の木はいや
 継ぎ継ぎに 万代にかくし知らさむ み吉野の秋津の宮は
 神からか貴くあるらむ 国からか見が欲しからむ 山川を清
 みさやけみ うべし神代ゆ 定めけらしも (巻六・九〇七番歌)

反歌二首

年のはにかくも見てしかみ吉野の清き河内のたぎつ白波

(九〇八)

山高み白木綿花に落ちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬかも

(九〇九)

右の歌は、第四十四代元正天皇の養老七年(七二三)五月の吉野行幸時に、宮廷歌人笠金村が詠み成した讃歌である。柿本人麻呂が持統天皇の吉野行幸時に歌った讃歌(巻一・三六〇三九番歌)以来の吉野讃歌である。人麻呂の吉野讃歌の第一長歌三六の歌い収め

の表現「見れど飽かぬかも」を第二反歌九〇九の第五句、九〇七からの作品全体の最終句に用いている。人麻呂の吉野讃歌にはミ語法表現は用いられていないので、笠金村が「山川を清みさやけみ」や九〇九の「山高み」のミ語法表現を用いたのは、巻七に収録されている『古集』の歌々（一一三〇～一二四六番歌らしい）の中の、次のような歌の傍線部の表現を考慮したことに拠ると考えられる。

皆人^{みなひと}の恋ふるみ吉野^{きよの}今日見ればうべも恋ひけり山川清み

（一一三二）

若狭^{みかつ}にある三方^{みかた}の海の浜清み行き歸らひ見れど飽かぬかも

（一二七七）

養老七年（七二三）五月のこの吉野行幸は、藤原氏の娘（藤原不比等の長女藤原夫人宮子）を母に持つ皇太子首皇子（後の聖武天皇）の即位（翌神亀元年二月）を予祝する目的で行なわれたらしい（伊藤博『萬葉集釋注三』当該歌釈文など）。この行幸に高橋虫麻呂の庇護者藤原宇合（官職は、式部卿であろう。『続日本紀』神亀元年四月七日条など参照）や虫麻呂自身も従っていたであろう。そして、先掲笠金村の吉野讃歌を直接聞いたと考えられる。高橋虫麻呂は、その「山川を清みさやけみ」（九〇七）、「山高み」（九〇九、原文表記「山高三」）、「見れど飽かぬかも」（九〇九、原文表記「雖見不飽香聞」）の表現を翌神亀元年（七二四）六月の「富士の山を詠む歌」の詠作時に考慮し、長歌三一九を「見れど飽かぬかも」（原文表記も同じ）で歌い収め、第二反歌三二二に「富士の嶺を高み畏み」という応用表現を成したのである。万葉集中に、自然を讃える

ミ語法表現の「形容詞語幹＋み」を二度連続させる「——をくみくみ」の形の表現は、笠金村の先掲吉野讃歌と高橋虫麻呂の先掲「富士の山を詠む歌」にしか見られない。「見れど飽かぬかも」の原文表記が同じであることは偶然ではなく、高橋虫麻呂は笠金村の吉野讃歌の歌稿を見る機会を持つことができたであろう。ミ語法表現の影響を受けた歌詠については、次節の考察によって九〇九関連の一首を加えることになる（後述）。

三・詠作意識②と私家集編集意識

高橋虫麻呂の「富士の山を詠む歌」の第二反歌三二二の「富士の嶺を高み畏み」の原文表記「布士能嶺乎高見恐見」に具体的な考察の手を及ぼそう。

「高見恐見」のように接尾語「み」に「見」の字を当てることで、実際に見る臨場感を伝えている。「恐見」の原文表記は、万葉集中他に二例（巻六・一〇二〇番歌、巻七・一一八〇番歌）。巻六・一〇二〇番歌の例は「王命恐見^{おほきみのみこと}」。天平十一年（七三九）の歌の例で当面歌より後の例。巻七・一一八〇番歌の例は「浪乎恐見」。上述の『古集』にある歌で、笠金村の詠作の場合と同様、その自然を対象としての歌のミ語法表現の原文「恐見」の例を富士の歌に襲用したものと考えられる。

一方の「高見」の例も、万葉集中他に二例しかない。それは、巻九の一七三二番歌と一七三六番歌である。巻九は柿本朝臣人麻呂歌集や高橋連虫麻呂歌集などの私家集を重要資料として成った巻で

あるけれども、一七二三番歌は、一七二二から一七二五番歌までの柿本朝臣人麻呂歌集の中の歌で、一七三六番歌は一七二六から一七六〇番歌までの高橋連虫麻呂歌集の中の歌である。

この二例のそれぞれの私家集中の位置を題詞と歌番号とによつて明示すれば、次のとおり(当該二例には歌番号に傍線を付する)。

筑波山に登りて月を詠む歌一首(一七二二)

吉野の離宮に幸す時の歌二首(一七二三～四)

右の三首は、作者未詳。

槐本が歌一首(一七一五)

山上が歌一首(一七一六)

春日が歌一首(一七一七)

高市が歌一首(一七一八)

春日蔵が歌一首(一七一九)

右の一首は、或本には「小弁が作」といふ。或いは姓氏を記せれど名字を記すことなく、或いは名号を僞へれど姓氏を僞はず。しかれども、古記によりてすなはち次をもちて載す。すべてかくのごとき類は、下みなこれに倣へ。

元仁が歌三首(一七二〇～一七二二)

絹が歌一首(一七二三)

島足が歌一首(一七二四)

麻呂が歌一首(一七二五)

右は柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。

丹比真人が歌一首(一七二六)

和ふる歌一首(一七二七)

石川卿が歌一首(一七二八)

宇合卿が歌三首(一七二九～一七三二)

碁師が歌二首(一七三二～三)

小弁が歌一首(一七三四)

伊保麻呂が歌一首(一七三五)

式部の大倭、吉野にして作る歌一首(一七三六)

兵部の川原が歌一首(一七三七)

上総の周准の珠名娘子を詠む一首并せて短歌(一七三八～九)

水江の浦の島子を詠む一首并せて短歌(一七四〇～一)

河内の大橋を独り行く娘子を見る歌一首并せて短歌(一七四二～三)

武蔵の小崎の沼の鴨を見て作る歌一首(一七四四)

那賀の郡の曝井の歌一首(一七四五)

手綱の浜の歌一首(一七四六)

春の三月に、諸卿大夫等が難波に下る時の歌二首并せて短歌(一七四七～一七五〇)

難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首并せて短歌(一七五一～二)

検税使大伴卿が、筑波山に登る時の歌一首并せて短歌(一七五三～四)

霍公鳥を詠む歌一首并せて短歌(一七五五～六)

筑波山に登る歌一首并せて短歌(一七五七～八)

筑波嶺に登りて「嬬歌会を為る日に作る歌一首并せて短歌(一七五九～一七六〇)

右の件の歌は、高橋連虫麻呂が歌集の中に出づ。

右の一七一二の前に置かれている一七〇九の左に「右は、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づるところなり。」とあり、一七一〇の一の左に「右の二首は、或いは『柿本朝臣人麻呂が作』といふ。」とあるので、一七二五の左の「右は、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。」の「右は」の表わす範囲は、一七一二から一七二五番歌までをさすと捉えられる。

また、一七六〇番歌の左の「右の件の歌は、高橋連虫麻呂が歌集の中に出づ。」とあるその「右の件の歌は」の表わす範囲は、一七二五の左の文まで出典明記はないので、『釋注五』に説くように、一七二六から一七六〇番歌までを指すと見られる。この部分には、虫麻呂の庇護者藤原宇合の歌三首（一七二九～一七三二）も存する。注視されるのは、柿本朝臣人麻呂歌集二七二～一七二五番歌の中ほどに位置する一七一九番歌の左に記されていることである。それは、柿本朝臣人麻呂歌集の一七二五～一七二九番歌は、題詞に姓氏の名を記さない歌群であり、一七二〇～一七二五番歌は、題詞に名のみを記して姓氏を記さない歌群となっていて、「古記」（当該「柿本朝臣人麻呂歌集」）のまま載せたということである。

そして、高橋連虫麻呂歌集一七二六～一七三七の場合も同様に考えるように指示している。その中の一七二六、一七二八、一七三二～三、一七三六、一七三七が題詞に姓氏のみで名を記さず、一七二九～一七三一、一七三五は題詞に名のみを記して姓氏を記さない。

以上のように、柿本朝臣人麻呂歌集の一七二二～一七二五番歌と高橋連虫麻呂歌集の一七二六～一七三七番歌は作者表記の上で密接

に関わっている。そのことのみならず、次に示すように歌詠の内容においても深く関わっているのである。

柿本朝臣人麻呂歌集を（柿）、高橋連虫麻呂歌集を（高）として、両歌集の歌の関連を示せば、次のようになる。

1（柿） 楽浪の比良山風ひらやまかせの海吹けば釣りする海人の袖返る見ゆ（一七二五）

（高） 難波潟潮干に出でて玉藻刈る海人娘せとめ子ども汝が名告らさね（一七二六）

2（柿） 率あどもひて漕ぎ去にし舟は高島の安曇の港に泊てにけむかも（一七二八）

（高） 高島の安曇の港を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ（一七三四）

3（柿） 照る月を雲な隠しそ島蔭に我が舟泊てむ泊り知らずも（一七二九）

（高） 大葉山霞たなびきさ夜更けて我が舟泊てむ泊り知らずも（一七三二）

4（柿） かはつ鳴く六田の川の川楊かはやぎのねもころ見れど飽かぬ川かも（一七三三）

（高） 我が豊三重たみへの川原の磯の裏にかくしもがもと鳴くかはづかも（一七三五）

5 (柿) 見まく欲^ほり来^こしくもしるく吉野川音のさやけさ見るにとも
しく (一二二四)

(高) 大滝を過ぎて菜摘^{なづみ}に近づきて清き川瀬を見るがさやけさ
(一二三七)

6 (柿) 吉野川川波高み滝の浦を見ずかなりなむ恋しけまくに
(一二二二)

いにしへの賢^{さか}しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬ
かも (一二二五)

(高) 山高み白木綿花に落ちたぎつ菜摘の川門見れど飽かぬかも
(一二三六)

右のような柿本朝臣人麻呂歌集の一七二一～一七二五番歌中の歌と、高橋連虫麻呂歌集の一七二六～一七三七番歌中の歌との表現の共通性は、柿本朝臣人麻呂歌集歌に学んで高橋連虫麻呂歌集歌が成立したことを物語っていると考えられる。

歌詠の表現のみならずその原文表記においても、次のように影響関係が見て取れる。

(柿) 「落多芸知」(一二一四)

(高) 「落多芸津」(一二三六)

(柿) 「河蝦」(一二二三)

(高) 「河蝦」(一二三五)

(柿) 「河浪高見」(一二二二)

(高) 「山高見」(一二三六)

(柿) 「雖見不飽」(一二二一、一二二三、一二二五)

(高) 「雖見不飽」(一二三六)

特に注目したいのは、高橋虫麻呂の「富士の山を詠む歌」の第二反歌三二一に用いられている原文「高見」の例である。万葉集中三例しかないミ語法「高み」の原文表記「高見」は、最初に柿本朝臣人麻呂歌集の一七二二番歌において「河浪高見」と用いられ、その影響を受けて高橋連虫麻呂歌集一七三六番歌に「山高見」と用いられたと考えられる。両歌はくしくも吉野での作で、一七二二は吉野川、一七三六は吉野の「山」に対してミ語法表現が用いられている。「山高見」の使用歌で「式部の大倭、吉野にして作る歌一首」と題詞にある一七三六番歌は、先掲の養老七年(七二三)五月の笠金村の吉野讃歌(巻六・九〇七～九〇九番歌)の第二反歌九〇九と次のように第四句のみ異なる歌である。

山高み白木綿花^{しらゆふはな}に落ちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬかも

(九〇九)

山高み白木綿花に落ちたぎつ菜摘の川門見れど飽かぬかも

(一二三六)

このことはいったい何を物語っているのか。思うに、一七三六の作者式部の大倭は、養老七年(七二三)五月の吉野行幸に従い、吉

野離宮のあった宮滝のあたりで笠金村が詠んだ九〇九番歌を記憶し、宮滝の上流の菜摘に行った時に、金村の九〇九番歌の第四句を現状に合わせて改変し即興的に詠んだものと思われる（後に表記する際には一七二二の「河浪高見」に拠ったのであろう）。一七三七番歌の作者兵部の川原の歌も、式部の大倭とともに菜摘に行く時の歌である。式部の大倭と兵部の川原は高橋虫麻呂の官人仲間なのであろう。式部卿藤原宇合の庇護を受けた虫麻呂も式部省の官人であつたと考えられ、特に式部の大倭とはよく知る仲であつたと察せられる。

先述のように、この養老七年（七二三）年五月の吉野行幸には、式部卿であつたと見られる藤原宇合とともに高橋虫麻呂も供奉していたと推定される。そして、虫麻呂は、笠金村の吉野讃歌の長歌九〇七の「山川を清みさやけみ」、第二反歌九〇九の初句「山高み」、第五句「見れど飽かぬかも」、さらにその九〇九番歌の第四句のみを改変した一七三六番歌の上記と同じ表現を翌神龜元年（七二四）六月の「富士の山を詠む歌」の長歌三一九と第二反歌三二一に応用したのである。

原文の表記においても、一七三六の「山高見」、九〇九と一七三六の「雖見不飽香聞」を襲用したのである。

三、高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の部分の配列と編集

卷九所収の高橋連虫麻呂歌集の、虫麻呂以外の他人の歌一七二六～一七三七（一七二七は『釋注五』に説くように虫麻呂作の仮託歌

と見られる）に対して虫麻呂作と見られる一七三八～一七六〇番歌は、『釋注五』に説くように、無季の歌（一七三八～一七四六）と季節の歌（一七四七～一七六〇）とから成り、無季の歌は、長反歌↓旋頭歌↓短歌という第一基準と、東国↓畿内という第二基準とに拠って配列され、季節の歌一七四七～一七六〇は、第一基準の春↓夏↓秋の季節の順序と、第二基準の東国↓畿内の順とによって配列されている。『釋注五』には、第一基準の無季と季節について次のように記している。

異本（稿者注、一七二二～一七二五の人麻呂歌集）ならぬ人麻呂集歌一六六七～七〇九が大きく他人の歌（一六六七～八一）と自作を中心とする歌（一六八二～七〇九）とに分かれ、その自作を中心とする部分が、（一）無季の歌（一六八二～九三）と（二）季節の歌（一六九四～七〇九）春・秋・冬とに分かれているのとまったく同じで、虫麻呂集歌三五首の配列はこれに倣ったのであろう。（中略）虫麻呂集歌のそれは人麻呂集歌を基準に卷九の編者が操作したことにより招かれた結果であらう。

これにつづけて、

その場合、内部基準において、東国↓畿内の順序が採られたのは、「原虫麻呂歌集」において、東国の歌が畿内の歌より前に一括されて存在したことに影響されていることであらう。

と述べている。

右にいう「原虫麻呂歌集」において、東国↓畿内の配列基準が採られたことについては、『釋注』にも触れていない重要なことが存する。

それは、叙上の考察から高橋虫麻呂が所有していたとも考えられる柿本朝臣人麻呂歌集〔釋注〕に言う「異本柿本朝臣人麻呂歌集」の一七二一〜一七二五の最初に置かれている「作者未詳」の三首一七二一〜一七二四が、次のように東国の歌↓畿内の歌の順に並べられており、虫麻呂がこの在り方に学んで虫麻呂歌集歌を収録したと考えられることである。

筑波山に登りて月を詠む歌一首

天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しも

(二七二二)

吉野の離宮に幸す時の歌二首

滝の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴き渡るは誰呼子鳥(二七二三)
落ちたぎち流るる水の岩に触れ淀める淀に月の影見ゆ

(二七二四)

右の三首は、作者未詳。

一七二二が東国(常陸)の歌、一七二三〜四が畿内(大和)の歌である。さらに、この三首を詳細に見れば、一七二二は「筑波山に登りて」「月を詠む歌」であり、一七二三〜四は、「吉野の離宮に幸す時の歌」である。虫麻呂は、このような題詞記載の表現にも学んで、虫麻呂作歌の題詞を記しているのである。順に掲げて示せば次のとおり。

上総の周淮の珠名娘子を詠む一首并せて短歌(一七三八〜九)

水江の浦の島子を詠む歌一首并せて短歌(一七四〇〜一)

春の三月に、諸卿大夫等が難波に下る時の歌二首并せて短歌

(二七四七〜一七五〇)

難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首并せて短歌(二七五一〜二)

検税使大伴卿が、筑波山に登る時の歌一首并せて短歌(二七五三〜四)

霍公鳥を詠む一首并せて短歌(一七五五〜六)

筑波山に登る歌一首并せて短歌(一七五七〜八)

筑波嶺に登りて嬬歌会を為る日に作る歌一首并せて短歌(一七五九〜一七六〇)

「春の三月に」「難波に経宿りて明日に還り来る時」「嬬歌会を為る日に」のように具体的に月や日を記しており、題詞はいずれも虫麻呂の染筆と見られる。

高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の部分(一七三八〜一七六〇)の最後の二七五九〜一七六〇の題詞には、右のように「作る歌」とあって、他と異なる。これは、虫麻呂歌集の他人の歌一七二六〜一七三七(ただし、一七二七は『釋注五』に説くように、虫麻呂作の可能性が高い)の一七三六の題詞「式部の大倭、吉野にして作る歌一首」と響き合うように置かれたものと見て狂いはなからう(一七三六題の「吉野にして作る」は一七三七にもかかわると見られ、一七三六〜七が実質的に高橋連虫麻呂歌集の他人の歌の最後に立つと言える)。

そして、この様相は、畿内(大和)の歌と、東国(常陸)の歌と

の響き合いであり、吉野（山水）と筑波山との響き合いである。このことはまた、先に見た柿本朝臣人麻呂歌集一七二一―一七二五の最初に置かれている東国の「筑波山に登りて月を詠む一首」（一七二二）と畿内の「吉野の離宮に幸す時の歌二首」（一七二三―四。山水）の三首の在り方とも響き合っていると見える。

このような響き合いを考えると、高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の部分一七三八―一七六〇は、虫麻呂自身の手によって東国↓畿内の順という基準により並べられていた可能性が高いと思われる。そこに巻九編者の無季の歌と季節の歌の第一基準が持ち込まれ、結果として『釋注五』に説くような配列の様相を呈することになったと考えられるのである。

本稿の説くことを裏づける歌が、高橋連虫麻呂歌集から巻八「夏雑歌」の最終位置に切り出された一四九七番歌である。それは次のとおり。

筑波山に登らざりしことを惜しむ歌一首

筑波嶺に我が行けりせばほととぎす山彦響め鳴かましやそれ

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。

この歌はもともとは巻九の高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の「霍公鳥を詠む一首并せて短歌」（一七五五―六）の直前に置かれていて、東国の歌（一四九七）と畿内の歌（一七五五―六）のように配列されていたと推定できる。一七五五―六番歌単独ではその二首を東国の歌か畿内の歌か判別しにくいけれども、本稿の上述の推定から、『釋注五』に説くように畿内の歌と見るのが妥当である。この東国

の歌（一四九七）と畿内の歌（一七五五―六）の組によって、巻九の高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の部分が、東国の歌↓畿内の歌の基準によって配列された複数の歌群から成っていたことが類推できるのである。

右の一四九七番歌が巻九の高橋連虫麻呂歌集から巻八「夏雑歌」の部に切り出されたのは、題詞に「筑波山に登らざりしことを惜しむ歌」とあるためと考えられる。^{（注3）}前述のように、巻九高橋連虫麻呂歌集の虫麻呂作の部分は、柿本朝臣人麻呂歌集（一七二二―一七二五）の最初に置かれている「作者未詳」の三首（一七二二―四）の東国の歌（一七二二）と畿内の歌（一七二三―四）の配列順序に学んで配列されたと考えられる。この東国の歌一七一二の題詞に「筑波山に登りて月を詠む歌」とあり、虫麻呂作の部分には、これと同様に歌の題詞に筑波山に登ることが明記されている。ところが一四九七番歌の題詞には「筑波山に登らざりしこと」とあり、異質である。このことを見て取った編者（巻九の編者以後の編者か）が一四九七番歌をほととぎす詠の多い巻八夏雑歌の部の最後に追補の形で巻九の高橋連虫麻呂歌集から切り出したものと考えられる。

このことと同様に、虫麻呂の東国の歌である「富士の山を詠む歌」（巻三・三一九―三二一番歌）についても考えることができる。この歌は神亀元年（七二四）夏六月の詠作で、もともとは（原高橋連虫麻呂歌集では）「霍公鳥を詠む一首并せて短歌」（一七五五―六）の直後に置かれていたと考えられる。それが後の編者（大伴家持たちであろう）によって巻九の高橋連虫麻呂歌集からはずされたのは、筑波山ならぬ富士山の歌であり、巻三の山部赤人の富士歌の次に切り出す位置を見出したことに拠ると考えられる。

(二〇二二年十一月二十六日)

注

1、「吉み」は形容詞「吉し」の語幹「吉」に接尾語「み」がついて名詞化した語で、吉いところの意。万葉集中の「繁み」などの用例(巻八・一五〇〇番歌など)と同用法。「並吉みの」についてはすでに詳しく論じているので、本稿では特に取り上げることとはしない(『なまよみの甲斐』考、都留文科大学研究紀要第六十七集、平成二十年〈二〇〇八〉三月二十四日発行など参照)。

2、万葉集にミ語法表現は多数存在する。その最初は、「讃岐の国の安益の郡に幸す時に、軍王が山を見て作る歌」(巻一・五〇番歌)の「心を痛み」(五)と「風を時じみ」(六)である。この歌については、表現の新しさが指摘されている。この二つのミ語法表現も表現の新しさを示す例と考えられる。万葉集全体のミ語法表現の考察は別稿に記す。

3、『釋注四』には、一四九七番歌の巻八への追補について「理由は不明。時鳥の声を惜しむ内容の季節歌である点に、格別着目したためか。」とある。

受領日…二〇二二年十二月一日
受理日…二〇二二年十二月二日